

1

a 通過

b 器官

c 分布

2 ウ 3 みちかけ いれかわり (完答)

4 I 自・日 II 公・年 III 公・月 5 (記述題) (完答)

6 光とすする (完答) 7 A イ B エ C ウ D ア (完答)

8 サーズム (完答) 9 ウ ↓ ア ↓ オ ↓ エ ↓ イ (完答)

10 エ 11 二つ目 <3> 三つ目 <6> (完答)

2

a 評判

b 断然

c 属する

2 (記述題) 3 いつくいる (完答) 4 I 読く II ド張し (完答)

5 I 三 II 六 III 万 IV 一 6 I イ II 褒めて

7 エ 8 (記述題) 9 わたし ア 理幹 エ (完答)

1

1 太陽を利用する藍藻類が他の生物が生きられる環境を生み、他の生物とも共生してきたし、海は強すぎる紫外線を防いで生物を助けたということ。

(同意可)

2

2 角野先生も、ひすいのことを優等生だと思っっているということ。

(同意可)

8

8 理幹が先生を怒らせるようなことをいうのも理解できないが、きちんと答えずに損得を持ち出してねじ伏せようとする先生にも納得できずにいる。

(同意可)

「配点」

1 1
5 4
2 2
8 8

各2点×13＝26点
各4点×14＝56点
6点×3＝18点
その他

- 1 a 「通過」は同音異義語との書き分けはもちろん、「通」・「過」それぞれについて字形にも注意して書く。b 「器官」は「氣」「管」とそれぞれ混同を避けてほしい。同音字との書き分けの定番である。c 「分布」は「広がり、散らばり。また、そうしてあること。」であり、生物学や統計学など、主要な現代的学問の中心概念であるので、確実に書けるようにしておこう。
- 2 具体的な様子をイメージする。不安があれば段落②も利用して確認すると確実である。
- 3 空所の前後から内容を確認する。二つ目は「鳥たちは」に注目して、コウモリと対比的な関係にあると読み取ろう。
- 4 IとIIはどちらでもよいのではなく、傍線部の直後に「その中でも私たちが一番強い影響を受けるのが日周期であろう」とあるので、「日」がIである。自転・公転は理科の知識でも解けるだろうが、段落①にも書かれていた。
- 5 段落③④を要約する。ただし、その際に「太陽」と「海」については内容を揃えていくという目算を立てながら書こう。太陽については生物進化の流れと太陽エネルギーの利用、海については紫外線遮断のことをまとめていく。
- 6 直前にあるとおり、「光と温度の両方に反応する」ことを述べている。こういった条件表現にも対応してほしい。
- 7 実験から読み取れることを問うている。国語はもちろん、今後学んでいくことになるあらゆる学問分野は根拠・証拠に基づいてどのような結論を導き出すのかという論理の流れが非常に重要となる。具体的な実験やデータからどのようなポイントを抽出するのか、どういうことを述べるために条件を揃えて実験するのかといった考え方・見方を身につけていこう。
- 8 直後を読むと、この周期性を保つ仕組みは「光刺激ではなく、マウスのからだの中にあるように見える」とある。それをさらに後続部では「サーカディアンリズム（を刻む時計が、各生物の体内にある）」と述べていた。
- 9 指示語や総括表現、時間の順序などにも注意して並べかえる。
- 10 サークァディアンリズムについては本文を参照して事実確認を取る。その上で、「天体の運行の周期」が何を意味しているのかはこの箇所の直前から引き継ぐ文脈に合わせて「日周期との同調」であると理解する。
- 11 内容の重複が少なく、また事項も多く羅列されていたので、「要するに何の話なのか」というのが感じ取りにくい文章であったかもしれない。実は——線部①と②がそれぞれの内容のまとめの箇所になっており、一つ目は「天体の周期的な運行と生物のリズム」、二つ目が「地球単位での太陽と生物の関わり」（天体としての地球と生物のリズムという観点で大きく見ると一つ目とまとまっていく）、三つ目が「生物の体内時計（と天体の運行の周期）」である。

2

- 1 a 「評判」は上下のいずれの字も、「評」の右側、「判」の左側がそれぞれ全体の音になっている、いわゆる形声文字である。b 「断然」は話し言葉などでもよく使う言葉かもしれないが、書けるようにしておこう。c 「属」は字形に注意するとともに、漢字の音読みに「くする」を付けてできている動詞であるということにも注目しておくとうい。
- 2 直前の「わたしは松田先生には優等生だと思われていたみたい」を受けて「その印象」と言っている。松田先生は一年のときの担任だったが、二年の担任は角野先生。その角野先生が直後にあるように「わたしにだけ」積極的に読書をしてくれるだろうと期待する声をかけたのであった。
- 3 すぐれた特徴のある賀川さんと倉本さんは「クラス全体の雰囲気を作っていく」ような存在である。この二人のことを述べていたのはこの箇所の他に、読書記録カードの提出のときであった。そこを見ると、「いつもクラスでキラキラしている」とある。
- 4 続く発言を確認すると「なにをどれだけ読んでいるのか、張り出されたくない人もいます」とあるので、「張り出し」に反対しているのだと判断できる。あとは何の張り出しかを確認すればよい。
- 5 II 「しかし」は「及ばない」の意味。IV 「貧者の一灯」は「まごころの尊いこと」のたとえ。
- 6 I 最後の場面でも「わざとらしいほど困っている顔（やれやれ）」をして」とあるように、「偶然」ではなく、「意図的に」見なかつた、つまり「あえて取り合わなかつた」とみるのがよいだろう。本文中には「先生が自分の出した意見をなんとも思っていないってわかつた」とある。
- II 理幹の主張を聞いたとき、「そういう考えもありますね」と言って「一瞬表情を硬くした」とあるように、先生自身の意図に反した反応だったのであろう。その直後に「だけど」とあるように、ふだん「褒めて伸ばす教育方針」を掲げているのだと書かれている。この逆接を捉えて「対照的」と問うているのだと考えればよいだろう。
- 7 文字や並びの外形ばかりが強調されている。出来事の流れと直接的に関わらない細部の表現も含めて、小説の表現は意図的・作画的なものだ（と見なす）というのが「受験国語のお約束」である。
- 8 「もやもや」であるから、「納得できない」「腑に落ちない」といった内容であろう。努めて教師からの評価を良くしようとする「わたし」にとつて、あえて反抗的な態度を取っているようにみえる理幹の態度は理解できないのだが、「自分がいわれたわけではないのに」とあるように、むしろここでは理幹の筋の通った主張に対する先生の言い草に「納得できなさ」を感じているようだ読み取れる。問6も参考してみると、先生の態度が表面的には「褒めて伸ばす教育方針」のような聞こえのいい言葉や正論を掲げるものでありながらも、事実上は気に入らない態度の生徒を排除するような「同調圧力」のように感じられているのであろう。「優等生」という評価と、「読むのが苦手」という自己認識の分裂によって、よりその矛盾に敏感になつている「わたし」の心情を汲もう。
- 9 問6で先生についてまとめたが、一方で「わたし」と、さらに対照的にみえる「理幹」の人物像を問うている。人物像の設問は本文全体に散りばめられた言動を集め、性格の表現に抽象化するものと言え、主題を問う設問同様、全体像の把握が要求されている。